

消火奮闘記(1995年4月号掲載・橋本 健)

はじめに



想像を絶する炎の大きさ、また延焼の速さで街区全体を猛炎に巻きこんだ地震による火災に、西消防団員 150 名が長田区の現場に出動、8 時間におよぶ懸命の消火活動を実施したが、その奮闘ぶりについてご紹介したい。

緊急支団長会議

大地震が発生した後すぐに各支団長は、分団詰所の開設と管轄区域内のパトロールを指示した。各分団長等はパトロール後詰所で警戒に入った。木村団長から三宅署長に電話が入り、支団長会議を開催し、各支団の被害状況の把握と今後の対応について協議したいとの事で、支団長会議を開催、その結果、西管内の被害が少ないことが分かり、団長から西消防団として火災現場へ

応援出動したいとの発言があり、各支団長も了解し、この旨を署長から警防部長へ伝え、長田の火災現場へ応援出動することが決定した。

活動概要

- (1)部署位置等
各支団長等は出動する班・団員を決定し西消防署に集結、木村団長以下 51 名が第一陣として出発、長田消防署に到着した。現場指揮本部から西代プールに部署し、戸崎通・西代通の防ぎよを命令され現場に向かったが、主要地方道神戸・明石線西行きは阪神高速道路及び国号 2 号線の不通による車両等大渋滞であり、前進することが困難な状態であった。サイレン・マイク等を使用しても道を開けてくれる車は少なく、かなりの時間を要してやっと西代プールに部署することができた。
- (2)消火活動等
 1. 西消防団各支団の小型動力ポンプ 7 台を使用し、ホース 120 本を延長、戸崎通 3 丁目の火災現場北側及び東側に 2 線延長し、防ぎよにあたったものであるが、道路は多数陥没し、歩行するのも困難な状況下であり、各支団連携のもと中継送水体制が完了するにはかなりの時間を費やした。
 2. 当時の火災の様相は、夜空に阿修羅のごとく炎が高くうずまき、西側及び南側へ我々が今までに経験したことがない速さで延焼している現場であった。民家の隣にあるペンシルビル(5 階建)に炎が入ると内部が激しく炎上し、わずかな時間のあいだに窓からその数倍の炎になって、周囲の民家に次々に延焼していく姿であった。その炎の勢いはまさに我々消防隊を嘲笑うがごとき速さで西へ西へと延焼していった。
あとで分かったことであるが、神戸大学工学部の室崎教授の調査によると、低層の住宅・高層地などに 4・5 階建のビルがぽつんと建っている場合、周囲の空気を取り入れてカマドのように内部が激しく炎上、丈夫の窓から 10 メートル近くも飛び火するもので、この現象は長田・兵庫管内で数多く発生し、大火構造の中層ビルが逆に火煙を拡大する「カマド現象」であった。
 3. このような困難な状況下であったが、なんとか北側及び東側への延焼阻止をしなければと各団員達は必死で頑張ったが、たびたび水圧が低下し放水が中断した。これはホースが車に轢かれ破裂し、そのたびに各団員はホースを交換するのに貴重な時間をとられ、口惜しい思

いをさせられた。このような状況下にあっても団員の志気は高く、8 時間にも及ぶ懸命な消火作業が夜を徹して行われた。そして、さすがの猛火も 1 月 18 日未明には終息の方向に至った。

別表 1 長田管内応援出動支団別一覧表

支団名	第 1 出動		第 2 出動	
	車両	人員	車両	人員
玉津支団	今津班	支団長以下 6 名	吉田班	副支団長以下 7 名
伊川谷支団	脇班	支団長以下 7 名	前開上班 池上班	副支団長以下 17 名
櫛谷支団	管野班 長谷班	支団長以下 7 名	寺谷班 池谷班	副支団長以下 11 名
押部谷支団	木見班	支団長以下 7 名	細田班 木幡班	副支団長以下 15 名
平野支団	下福班 西戸田班	支団長以下 8 名	芝崎班	副支団長以下 12 名
神出支団	神納班	支団長以下 9 名	田井班 山西班 広谷班	副支団長以下 19 名
岩岡支団	秋田班	支団長以下 7 名	赤坂班 上新地班	副支団長以下 18 名
合計	9 台	51 名	13 台	99 名
総計	22 台 150 名			

- 出動時間帯

- 第 1 出動 1 月 17 日 16 時 30 分-1 月 18 日 1 時 00 分
- 第 2 出動 1 月 17 日 22 時 00 分-1 月 18 日 3 時 00 分

西消防団防御図

● 小型動力ポンプ配置場所

